

## 平成25年度 長野県諏訪清陵高等学校自己評価表

※評価(達成度) 1:不十分 ~ 5:十分達成された

教育目標	取組	評価の観点	達成度	意見(本年度の取組・次年度への課題等) ○成果、◆課題、■改善策・向上策
生徒の学力向上 (重点目標)	①生徒の家庭学習時間の増加 ②教員の指導力向上と授業改善 ③教科における課題の明確化と解決に向けた計画的な取組 ④SSH、生徒による授業評価、自反会(土曜講座)、授業シラバスの活用	①生徒の学力が向上したか。	4	○進路指導・キャリア教育計画に基づき、生徒の学力向上に向けた指導を行った。 ■個々の課題に向けて、今後も分析・検討しながら、次年度計画を立案し、改善に努めたい。 ○放課後補習などを通して、授業内容を越えた深い内容まで踏み込んだ。 ○昨年度に引き続き、数学の日々の演習、国語の希望者課題や100字要約、英語の単語テストや週末課題など、各教科の工夫・努力によって、学年全体あるいは上位者に継続的な学習を意識させ、教科によっては底支えの効果も現れてきている。(2年) ○基本事項の定着を目指し、年間を通して取り組みを行った。 ◆模試などのデータに基づき対策を練り、取り組みを行ってきたが学習習慣の定着にまだまだ課題がある。 ○後半に大きく伸びてきた生徒と、若干出遅れの生徒が見られたが、総じて向上してきた。 ◆模試の結果などから面談を通じて弱点補強に対するアドバイスや各教科での取り組みを行ってきたが基礎学力の定着が不十分な生徒が見られた。
		②生徒の満足する授業、知的探究心を喚起する授業ができたか。	4	○授業評価等を通じて、指導改善に努めることができた。 ○創意工夫しながら授業を行った。 ○担当者がそれぞれ工夫をして、豊かな授業を作る工夫をしている。 ○SSHを中心に、刺激を受けた生徒が見られた。 ◆前期特編授業においては、生徒の幅広いニーズに必ずしも対応しきれいかなかった面があった。
		③家庭学習時間の増加が図られたか。	3	○全学年共通時期に学習状況を調査し、現状を分析し、指導改善に努めた。 ■家庭学習時間については、継続的な課題として、今後検討を続ける必要がある。 ○生活実態調査や面談等で学習不適応の生徒を最小限に食い止める効果があったと思われる。 ○スコラノートを利用して、自己管理能力の伸張を促した。また、模試等を短期目標として設定し、各自が計画的に学習するよう促すことにより、3年次へ向けて自主的に基礎固めをしていく姿勢が生まれてきている。スコラノートについては一部の生徒は非常によく活用しているが、あまり定着していない。引き続き指導していきたい。(2年) ◆生徒の家庭学習時間が2時間に満たない状況の中で、国語に十分な時間がかけられない状況が続いている。 ◆タイムマネジメントのためのスコラノートを全員に持たせたが、うまく活用できない生徒が多く見られ、教師からの指導の必要性が感じられた。 ○面談等を通じて少しでも密度の濃い・実現可能な学習時間確保について改善をし、一定の効果は得られた。 ◆高校1年から一定時間の家庭学習時間が確保されないと相応の基礎学力の定着は難しい。
		④生徒による授業評価に基づく授業改善がなされたか。	4	◆前期評価が実施されなかったのは残念である。3学年に関してはセンター試験後の感想等から判断した。 ■次年度は必ず中間評価の実施をお願いしたい。○自習時の課題や体勢などに改善を行った。 ◆クラブ活動との両立が難しく、学習事項を積み残したまま毎日が過ぎ、基礎学力に不安を持つ生徒が多い。 ○前期の授業評価に基づき改善を図った。○進路意識の高い生徒ほど問題意識を持ち意欲的に取り組んでいた。
		⑤各教科の課題が解決されたか。	3	○模試の結果を各教科で共有することで、昨年との比較、他教科との比較ができ、課題解決および今後への考察になった。 ○基礎・基本の定着のための方法を模索し、実施した。 ○基礎学力の定着とセンター・二次に対応できる力をつけるべく教材を精選して繰り返し行った。 ◆後期については、演習の要素が入ってきたため、解説にかかる時間が少なかった。
		⑥自反会の目的に貢献できたか。	4	○自反会の管理が職員全体の協力のもとで行われた。 ◆もっとポイントを絞った指導が必要である。 ○土曜講座は年間を通して欠席が少なく、生徒が前向きに取り組むことができた。 ○補習では意欲的な取り組みが見られ、学力向上につながった。
		⑦シラバスの整備と活用が図られたか。	4	○全学年冊子としてまとまり、活用できた。 ◆さらに活用につながるシラバスの整備をはかりたい。 ○早めにシラバスを整備できた。 ○昨年に続きシラバスの整備および活用を図った。
主体的な進路選択と進路実現の支援	①合同HR、講演会等による進路意識の向上と進路研究への支援 ②実力テストや校外模試の分析と事後指導 ③生徒・保護者、職員への進路情報の共有 ④指導の継続及び改善のための進路係と各学年間の連携 ⑤社会的・職業的に自立した人間の育成を目指すキャリア教育の推進	①生徒の進路意識を向上させ主体的な進路選択ができるような取組ができたか。	4	○全学年ともキャリア教育計画に基づき生徒の意識向上に努められた。 ○3年間の継続的な進路指導のもと、大学進学を意識付けが定着し、全員に近い生徒がセンター試験に出席し受験できた。 ○4月、学習オリエンテーションを行い、発表者が自分の将来について発表を行った。皆、事前の調べ学習から課題に真剣に取り組み、自らの進路について考えを深める良い機会となった。また、10月のキャリア講演会では目加田氏のお話を伺い、世の中に対する怒りのエネルギーと高い知性とで活躍されている姿に感銘を受け、将来へ向けて進む意欲が高まった。(2年) ○学習オリエンテーション、学習合宿、進路講演会等を企画し、意欲のある生徒を伸ばす努力をした。
		②生徒の自己目標実現のための指導に十分取り組めたか。	4	○キャリア教育計画に基づき、各学年共に計画的に指導を行った。 ○数学のほぼ毎日の課題、英語の週末課題、国語の添削指導、理科社会の補習等、生徒の基礎・基本を伸ばす取り組みをしてきたが、まだ途上である。
		③実力テストや校外模試が有効に活用されたか。	4	○計画に基づき実施した。結果は教科回覧し、学年でも詳細に分析検討を行い、職員会で報告した。 ○受験校を決めていく過程での生徒面談、保護者懇談等大いに活用できた。 ○ハイレベル模試は昨年度の第3回から行っているが、意識の高い生徒が継続して受験しており、学習集団の核となってきた。また、各模試は生徒の学習計画の中で短期的な目標となり、意識の高い生徒たちにとっては、学習の計画的継続に役立っている。(2年) ◆受験後の指導ができると、さらに学力を伸ばすことができるのではないかと。
		④進路情報が生徒・保護者、職員に適切に伝えられたか。	4	○指定校推薦などの情報を他学年にも呼びかけて多くの生徒が同一条件で見られるように工夫した。 ○学年PTA(クラス懇談会)を秋にも行い、保護者の質問等に答えるとともに、今後の指導の流れを説明することができた。

		⑤進路係、各学年間の連携が十分に図れたか。	4	○進路係を定期的に開き、係としての方向性を確認し、学年間の情報交換や連携を取った。さらに連携を深められるように努力したい。 ○進路主任が3学年会に出席することで、進路と学年が常に最新の情報を共有できた。
--	--	-----------------------	---	--

評価項目	取組	評価の観点	達成度	意見(本年度の取組・次年度への課題等) ○成果、◆課題、■改善策・向上策
SSHを活用した教育活動の充実	①国際的な科学技術系人材を育成するためのカリキュラム等の研究開発を行う(課題探究・科学セミナー等) ②融合型授業の指導法を研究する(SSH情報・科学英語入門の設置) ③大学、企業との連携による講座開講(地元先端技術産業の見学および研修実施) ④「清陵サイエンスフォーラム21」の開催 ⑤科学系クラブ活動の振興 ⑥国際性を育む(科学英語入門・海外科学セミナーの実施)	①理数英を中心に各教科で指導内容・方法の研究開発に取り組み、校内で組織的に研究が推進されたか。	4	○学校設定科目「SSH情報」、「スーパーサイエンス」、「科学英語入門」の研究開発を行った。「SSH情報」と「科学英語入門」では、複数教科職員による融合型授業を研究した、また、前者では、新たに地元の先端技術産業研修及び諏訪園工業メッセ見学を実施して、それをもとに課題研究を行って年度末に一般公開で発表した。また、その学習体験を2年次以降の課題研究に生かせるようなカリキュラム開発を行った。 ○「SSH評価検討委員会」を発足させ、学校全体の取組にするよう改善した。
		②生徒の自然科学に対する興味・関心を高め、学習意欲が向上する取組であったか。	4	○課題探究を通して生徒の興味・関心を高めることができた。課題探究については、テーマ設定についてSSHコース生徒から約150テーマを提出させ、それが探究テーマとして相応しいか議論させることから始めた。学生科学賞県知事賞1本、優良賞1本、地球惑星科学連合高校生セッション佳作1本等の成果を上げた。 ○科学系クラブが積極的に地域の児童生徒に向けて「わくわく科学教室」などの普及活動を行った。
		③生徒の満足度を高める取組であったか。	4	○「清陵サイエンスフォーラム21」、「科学セミナー」、「海外科学セミナー」など生徒の満足度は高かった。 ○「海外科学セミナー」では、新たにアラスカ大学教職員に対して、課題探究の成果を英語で口頭発表する機会を設けた。探究分野の専門家から助言を頂けるなど、英語を活用した実地でのコミュニケーションを行うことができ、生徒の満足度は大変大きかった。
		④連携を効果的におこなえたか。	4	○連携講座を計画どおり実施できた。 ○一つひとつの連携講座を一過性のものとするのではなく、学習内容を積み上げて生徒の科学的態度や興味関心を高めるよう取組んだ。例えば、東京大学木曾観測所天文講座、国立極地研究所オーロラ講義、夜間観測実習を事前学習として海外科学セミナーを実施することで、アラスカ大学等での研修をより効果的に実施することができた。
中高一貫教育に向けた学校全体の取組	①6年間を見通した授業の在り方の明確化 ②生徒募集に向けた広報活動の充実 ③入学者選抜の実施	①中学と高校を有機的に結びつける教育内容になっているか。	3	○6年間を見通した視点から、中学の教科書及び副教材の選定を行うことができた。 ◆さらに中学の授業に高校の視点を入れていく方策を考えたい。
		②学校説明会等を通して、本校の目指す中高一貫教育を十分に伝えられたか。	4	○学校説明会893名、開校前年記念フォーラム87名、地域懇談会219名、入学者選抜説明会1093名の参加を得ることができ、多くの方に関心をもっていただいた。
		③入学者選抜の計画・実施が確実に行われたか。	3	○選抜委員会の先生方を中心に全校体制で実施していただき、無事終えることができた。 ◆今年度の反省を来年度の改善につなげるよう計画を作成したい。
自主・自立性に基づく「清陵生としての自覚」を高める指導	①学生会の諸機関と協議して、生徒に自ら考えさせる指導 ②学校生活におけるモラルの向上 ③生徒・職員が共に互いの人格を認め合う学校づくり	①学校生活の様々な場面において適切な指導ができたか。	4	○交通マナーに関することをはじめとして、時機をとらえて全校生徒に注意を喚起した。
		②学生会へ効果的な指導助言ができたか。	4	○学生会に新設された文化生活委員会に働きかけることで、生徒の自治活動としての生活の見直しの糸口とした。 ■文化生活委員会の活動を活性化させ、真の自治を発展させるための助言を行う。
		③生徒の自主・自立性を尊重した指導ができたか。	4	○自らの頭で考えるための、他人事と考えないような情報の提供に努めた。
学生会の自主的活動支援とクラブ活動の活性化	①顧問の適切な指導 ②活動の保障 ③各委員会の活性化	①学生会活動を自主的に推進するための指導ができたか。	4	○校歌指導をはじめとする校風や交通風紀を司ることを目的とする「文化生活委員会」を新たに発足し(文化委員会からの改称)、自治精神の具現化に努めた。
		②クラブ活動の時間、場所を保障し適切な指導ができたか。	4	○クラブ加入者数は減ることなく、各顧問の努力により運動系、文化系ともに健全なクラブ活動が展開され、全国大会出場などの実績も出ている。
		③役員以外の委員も機能する組織体制を構築できたか。	3	○役員や委員長、副委員長ばかりが目立つのではなく、一般委員をあまねく活動させる工夫を施すよう、役員会等で働きかけ、改善の緒に就いている。
広報活動の充実	①ウェブサイトの充実と校内運営体制の整備、広報誌「清水ヶ丘便り」の充実、学校案内ビデオ・パンフレット作成、中学校訪問 ②授業公開日の適切な設定	①ウェブサイト、「清水ヶ丘便り」等は充実していたか。	4	■さらに見やすいウェブサイトを構築するよう計画している。 ■「清水ヶ丘だより」には中学の話題も載せていく。
		②本校の教育活動を保護者、中学校、地域住民等に十分に伝えられたか。	4	○公開授業には、昨年度を上回る参観者があった。また、小学生も多数来校した。 ◆学校紹介ビデオの更新が必要である。